

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごへんじ

四條金吾殿御返事

はつふうしやう

(八風抄)

新版
1564
〜
1567

しじようきんごどのごへんじ はつぷうしやう
四條金吾殿御返事（八風抄）

けんじ ねん
建治2年（'76）または同3年（'77）

さい さい
55歳または56歳 四條金吾

もう 承
はるかに申しうけたまわり候わざりつれば、いぶせく

そらち
候いつるに、かたがたの物と申し、御つかいと申し、よろ

い
こび入って候。またまぼりまいらせ候。

しよりやう あいだ おんこと かみ
所領の間の御事は、上よりの御文ならびに御消息引き

あ みそらち お
合わせて見候い畢わんぬ。このことは、御文なきさきに

推
すいして候。

ごしやうそくひ

おんふみ 無 前

鬱 悒

かみ さいだいじ 思

そうら

おん 近習

上には最大事とおぼしめされて候えども、御きんずの

ひとびと

讒 奏

しよりよう

嫌

かみ

軽

人々のざんそうにて「あまりに所領をきらい、上をかるし

そうろう

縦

横

ひと

多

そうろう

めたてまつり候。じゅうおうの人こそおおく候に、か

そうら

ごおん

たも

くまで候えば、しばらく御恩をばおさえさせ給うべくや

そうろう

もう

推

そうろう

候らん」と申しぬらんとすいして候なり。それにつけ

おんこころ 得

ごようい

ては御心えあるべし。御用意あるべし。

わ み

もう

親

類

親

もう

みうち

我が身と申し、おや・るいしんと申し、かたがた御内に

ふびん

そうろうだいおん

しゆ

うえ

過

不便といわれまいらせて候 大恩の主なる上、すぎにし

にちれん

ご 勘 気

とき

にほんいちどう

憎

でしとう

日蓮が御かんきの時、日本一同にくくむことなれば、弟子等

しよりよう 大 方 召

かたがた

もあるいは所領をおおかたよりめされしかば、また方々の

ひとびと

みうち うち 出

しよりよう 追

人々もあるいは御内の内をいだし、あるいは所領をおいな

みうち 何 ごと

おんみ

んどせしに、その御内になに事もなかりしは、御身にはゆ

だいおん み そうろう

いちぶん ごおん

ゆしき大恩と見え候。このうえは、たとい一分の御恩な

恨 たも しゆ

重

くとも、うらみまいらせ給うべき主にはあらず。それにかさ

ごおん もう しよりよう 嫌 たも

おん 答

ねたる御恩を申し、所領をきらわせ給うこと、御とがにあ

らずや。

けんじん はつぷう もう やつ 風 侵

賢人は、八風と申して八つのかぜにおかされぬを、賢人と

もう うるお おとろ やぶ ほま たた そし くる

申すなり。利い・衰え・毀れ・誉れ・称え・譏り・苦し

たの 大 喜 衰
み・楽しみなり。おお心は、利いあるによるこばず、おとろ

歎

とう

はつぷう

侵

ひと

うるになげかず等のことなり。この八風におかされぬ人を

かなら

てん

守

たも

非理

しゆ

恨

ば、必ず天はまぼらせ給うなり。しかるを、ひりに主をうら

そうつら

もう

てん

守

たも

みなんどし候えば、いかに申せども、天まぼり給うことな

し。

そしよう

もう

かな

もう

かな

訴訟を申せど叶いぬべきこともあり、申さぬに叶うべき

もう

かな

そうつら

を申せば叶わぬことも候。

よ 廻

とのぼら

そしよう

もう

かな

由

夜めぐりの殿原の訴訟は、申すは叶いぬべきよしをか

そうつら

歎

うえ

にちれん

故

がえて候いしに、あながちになげかれし上、日蓮がゆえに

召

そうろう

ふびん

そうろう

めされて候えば、いかでか不便に候わざるべき。ただし、

そしよう

もう

たま

祈

そうろう

もう

「訴訟だにも申し給わずば、いのりてみ候わん」と申せ

承

そうろう

やくそく

しかば、「さうけたまわり候いぬ」と約束ありて、また、

折紙

書

ひとびとそしよう

論

もう

おりかみをしきりにかき人々訴訟ろんなんどありと申せし

とき

そしよう

かな

思

そうら

延

時に、この訴訟よも叶わじとおもい候いしが、いままでの

そうろう

びて候。

大 学 殿

右 衛 門 太 夫 殿

こと

もう

だいがくどの、えもんのたゆうどのの事どもは、申すま

そうろう

祈

かな

そうろう

まにて候あいだ、いのり叶いたるようになみえて候。

波 木 井 殿

こと

ほうもん

ごしんよう

そうら

はきいどのの事は、法門は御信用あるように候えども、

そしよう もう

ほよう

この訴訟は申すままには御用いなかりしかば、いかんがと

ぞん

そら

もう

そら

故

存じて候いしほどに、さりとはと申して候いしゆえに

そら

少

験

そら

思

や候いけん、すこししるし候か。これにおもうほどなか

りしゆえに、またおもうほどなし。

檀 那

し

思

合

祈

みず

うえ

ひ

焚

だんなと師とおもいあわぬいのりは、水の上に火をたく

檀 那

し

そら

だいほう

がごとし。まただんなと師とおもいあいて候えども、大法

しょうぼう

犯

年 久

ひとびと

おん

を小法をもつておかしてとしひさしき人々の御いのりは、

かな

そら

うえ

わ

み

檀 那

滅

そら

叶い候わぬ上、我が身もだんなもほろび候なり。

てんだい

ぎす

みよううん

もう

ひと

だいがじゆうだい

ぎす

天台の座主・明雲と申せし人は、第五十代の座主なり。

い あんげんにねんごがつ いんかん 被 いずのくに はいる さんそう
去ぬる安元二年五月に院勘をかぼりて伊豆国へ配流。山僧、

おおつ 奪 返 ざす
おおつ

大津よりうばいかえす。しかれども、またかえりて座主と

過 じゆえいにねんじゆういちがつ よしなか 擲 取

なりぬ。またすぎにし寿永二年十一月に、義仲にからめと

うえ くび 打 斬 流

られし上、頸うちきられぬ。これは、ながされ、頸きらる

失 もう けんじん しようにん そうろう

るをとがとは申さず。賢人・聖人もかかること候。

げんじ よりとも へいけ きよもり かつせん お とき

ただし、源氏の頼朝と平家の清盛との合戦の起こりし時、

きよもり いちるいにじゆうよにん きしよう 書 れんぱん がん た

清盛が一类二十余人、起請をかき連判をして、願を立てて

へいけ うじでら えいざん 侍 さんぜんにん ふぼ

「平家の氏寺と叡山をたのむべし。三千人は父母のごとし。

やま 歎 われ やま よろこ われ

山のなげきは我らがなげき、山の悦びは我らがよろこび」

もう

おうみのくににじゅうしぐん

いつこう

寄

そうら

と申して、近江国二十四郡を一向によせて候いしかば、

だいしゆ

ざす

いちどう

うち

しんごん

だいほう

尽

そと

あく

大衆と座主と一同に、内には真言の大法をつくし、外には悪

そう

げんじ

射

よしなか

ろうどう

樋

口

僧どもをもつて源氏をいさせしかども、義仲が郎等、ひぐち

もう

男

よしなか

ご

ろくにん

えいざん

ちゆうどう

と申せしおのこ、義仲とただ五・六人ばかり叡山の中堂に

馳

登

じようぶく

だん

うえ

ひ

い

縄

はせのぼり、調伏の壇の上にありしを引き出だしてなわを

付

にし

坂

たいせき

転

ひ

お

くび

打

つけ、西ざかを大石をまるばすように引き下ろして頸をう

き

にほん

ひとびとしんごん

疎

ち切りたりき。かかることあれども、日本の人々真言をうと

尋

むことなし。またたずぬることともなし。

い

じようきゆうさんねんかのえみご

ろく

しち

さんかげつ

あいだ

きよう

い

去ぬる承久三年辛巳五・六・七の三箇月が間、京・夷

かつせん

とき

にほんこくだいいち

ひほう

尽

の合戦ありき。時に日本国第一の秘法どもをつくして、

えいざん

とうじ

しちだいいじ

おんじようじとう

てんしyouだいいじん

しyouはちまん

さんのう

叡山・東寺・七大寺・園城寺等、天照太神・正八幡・山王

とう

いちいち

おん

祈

なか

にほんだいいち

そう

等に一々に御いのりありき。その中に日本第一の僧

しじゆういちにん

さき

ざす

じえんだいそうじyou

とうじ

おむろ

四十一人なり。いわゆる前の座主・慈円大僧正、東寺、御室、

みいでら

じyouじゆういん

そうじyouとう

たびたびよしとき

じyouぶく

うえ

三井寺の常住院の僧正等は、度々義時を調伏ありし上、

おむろ

ししんでん

ろくがつはちにち

ごじyouぶく

なのか

御室は紫宸殿にして六月八日より御調伏ありしに、七日と

もう

おな

じyouよつか

戦

負

せいたか

くび斬

申せしに、同じく十四日にいくさにまけ、勢多伽が頸きら

おむろ

思

じ

し

そつら

しんごん

れ、御室おもい死にに死しぬ。かかること候えども、真言

失

怪

ひとそつら

しんごん

はいかなるとがともあやしむる人候わず。およそ真言の

だいほう 尽

みゆううんだいいちど

じえんだいにど

にほんこく

大法をつくすこと、明雲第一度、慈円第二度に、日本国の

おうぼう 亡

そうら お

王法ほろび候い畢わんぬ。

こんどだいさんど

そうろう

とうじ

もうこじようぶく

今度第三度になり候。当時の蒙古調伏これなり。かか

そうろう

ひじ

ひと

言

こころ

ること候ぞ。これは秘事なり。人にいわずして心に

ぞんち

たま

存知せさせ給え。

ごそしよう

恨

されば、このこと御訴訟なくて、またうらむることなく、

みうち

出

われ 鎌 倉

打

居

前

々

御内をばいせず、我かまくらにうちいて、さきざきよりも

しゅつし

遠

差

出

出仕とおきようにて、ときどきさしいでておわするならば、

かな

そうら

悪

見

たも

叶うことも候いなん。あながちにわるびれてみえさせ給う

べからず。

欲
よくと名聞
みようもん

いか
暝りとの。